大地に刻まれた西会津の足跡

地形からみた西会津の歴史 その５

―野沢宿―

文：田崎　敬修

野沢宿のできた正確な時期は不明ですが、３つの説があります。

野沢６人衆といわれる人々が野沢に町並みを作るため、領主の芦名氏に願い出、1522年（大永２年）願いが許され原町と名づけたというのが１つ目です。松原但馬（まつばらたじま）が常楽寺を再興した1596年(慶長元年)頃というのが２つ目で、３つ目は庄司吉之助氏説の原町が駅所（えきしょ）（運輸通信事務を取り扱う事務所が置かれた所）になったのは1620年（元和６年）頃というものです。

越後街道が１里36町で整備されたのが1667年（寛文７年）ですから、駅所の仕事をする宿場になったのは早くても庄司氏の元和６年頃が妥当だと思います。会津藩が編さんした『新編会津風土記（しんぺんあいづふどき）』には、野沢本町・原町は昔、湖水のようであって周りの山麓に住んでいたが水が退いた後、先ず本町の民が住み、次いで原町に先の６人衆が住み駅所ができたとあります。６人衆が先ず移り住んだ場所は、現在の原町通りではなく、水が得やすい野沢川周辺だったと思います。大久保街道と宿場裏道が交差する辺りの字名が「字野沢」であることからも、うなずけるのではないでしょうか。

しかし、宿場町の町並みを作るには段丘崖が野沢川に迫っていたため、上の段丘上に移動せざるを得なかったようです。欠点は、宿場中央の水路に流す水がなかったことです。そのため長谷川の上流山口地内から堰を作って水を引くことになりました。野沢宿の町割は、上野尻宿のようにきれいな長方形ではなく、ほぼ段丘崖などの地形に沿った形をしています。宿場町特有のクランクは、街道の変遷に伴って合計５つあり、どれもほぼ直角に曲がっています。（これについては後の号で紹介）

▲ 国土地理院発行　1/2.5万地形図「野沢」拡大・着色

退水後、先ず本町に民が住み着いたのに中心地にならなかったのはなぜでしょうか。誤解を覚悟で理由をいくつか推測してみましょう。

①野沢６人衆の結束（リーダーシップ）が強かった。

②本町より原町の方が平地が広かった。

③有力地頭（じとう）の荒井氏の館が原町（現役場）にあった。

④原町の鎮守の熊野神社は町西端の小屋田にあったのを移しており、小屋田長者伝説もあり古くは小屋田付近が賑わっていた。

などの理由から、本町ではなく原町が中心地になったのでしょうか。なお、本町が正式に駅所になったのは1806年（文化３年）で両町が合体して現在の野沢宿が完成しました。

今月の表紙

８月３日、こども研究塾の塾生たちと会津きのこ工房菌床センター内を見学してきました。

目の前に広がるしいたけ栽培の様子に、塾生はもちろん同行した大人も思わず「わあ～～！」と歓声を上げました。

塾生たちは、まっすぐ育つしいたけを覗き込みながら、元気なしいたけが育つには毎日の管理と工夫が必要であることを実感したようでした。

編集後記

今月号もお読みいただきありがとうございます！今回の特集ではごみ問題や認知症についてなど暮らしを支える取組みや活動を紹介しました。情報を届けるだけでなく、次の一歩につながる広報紙になると嬉しいです。来月号もお楽しみに！（三留）

にしあいづ
広報にしあいづ №815　令和８年９月号
発行／福島県西会津町　編集／総務課　TEL 0241-45-2211（代表）
ホームページ　https://www.town.nishiaizu.fukushima.jp/
PRINTED WITH SOY INK
この広報紙は、環境に優しい大豆油インキを使用しています。